


# 西域伝 (上)

伴野朗

大唐三蔵物語



集英社文庫

 集英社文庫

さいいきでん だいとうさんぞうものかたり  
西域伝——大唐三蔵物語(上卷)

1990年7月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 とも の 野 郎

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10  
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印刷 凸版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。  
送料小社負担でお取り替えいたします。

©R.Tomono 1990

Printed in Japan  
ISBN4-08-749608-2 C0193

江苏工业学院图书馆

集英社文庫  
西藏(域)书(章)  
大唐三藏物語

伴野朗



集英社版

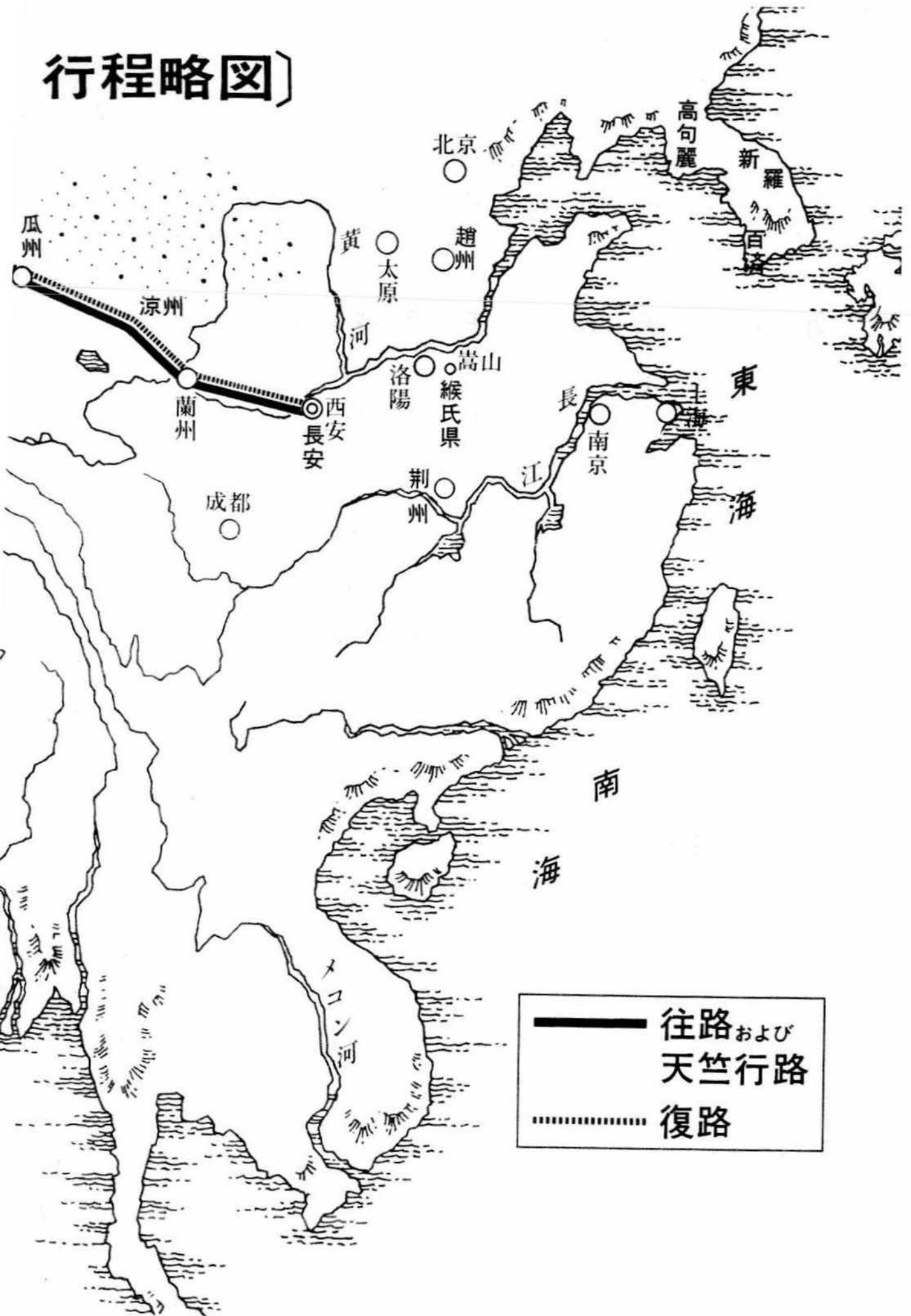


目次(上卷)

難	壯	玄	疾	崩	出	遠	場	陰	嵩	プロローグ
関	途	武	風	壊	家	征	帝	謀	山	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三九一	三五〇	三〇六	二六九	二三三	一九五	一五五	一〇四	六二	一五	八



# 行程略図]



— 往路および  
 天竺行路  
 ..... 復路

# 〔玄奘〕



地図

さがら常廣



西域傳——大唐三藏物語 上卷

## プロローグ

一人の高僧が、夢を見た。

彼は、死の床についていた。二十余年にわたって彼を苦しめていた風病が、このところとみにひどくなってきたのである。いままでいうリユーマチスである。発作が起るたびに、死ぬ苦しみを味わうのだ。彼は、すでに百歳を超えていた。

——もう死ぬ時期かも知れぬ……。

彼は、食を断って死を迎えることにした。床についてから五日目を迎えようとしていた。

不思議な夢であった——。

三人の天人が現われたのだ。一人は、黄金色、二人目は瑠璃色、そして最後の一人は白銀色の衣服を身につけていた。三人とも姿態は美しく、衣服は軽やかで、輝いていた。

黄金色の天人が、彼に近づいてきた。

「そなたは、いま自らの身を棄てようとしているが、その病苦は、過去の罪業のものである。世を厭って死を選べば、永劫にその業は消えまい。いまはよく忍び、仏法を広め、罪を消さねばならぬ時であるぞよ——」

その声は、涼やかで、とてもこの世のものとは思えなかった。黄金色の天人は、瑠璃色の天人を指差した。

「そなたは知っておるか、こちらは、観世音菩薩であるぞ」

彼は、思わず頭をさげた。そうせずにはおれない神々しさを感じたのである。黄金色の天人は、白銀色の天人を示していった。

「こちらは、弥勒菩薩である——」

高僧は、またもや平伏し、礼拝して問うた。

「私めは、いつも御身のもとに生まれ代るように願っております。この願いは達せられましようや？」

弥勒菩薩が、答える。

「そなたが正法を広く伝えたならば、後世にはその願いが達せられるであろう」

「ははあ——」

彼は、身の縮むような緊迫感に捉われた。それは、かつて経験したことのない種類のものだった。

黄金色の天人が、名乗りをあげた。

「われは、曼殊室利菩薩である……」

曼殊室利菩薩は、文殊菩薩を意味する梵語である。文殊は、智慧を司る菩薩として知られている。文殊菩薩は、言葉を継いだ。

「……そなたが自ら身を棄てようとしているのを見て、われら三人でここに参った」

老僧は、ただただ無言で頭をさげた。

「そなたは、われらが言葉に従い、『瑜伽論』その他の正法を、まだその教えを聞かぬ国々にあまねく広められよ。近くチーナ国からそなたについて学ぶために、一人の僧が参る。そなたは、この者を待ち、教えを垂れなければならぬ——」

なんともいえぬ精神の昂りが、老僧の心のなかに起った。それは、心の芯を突き動かすような激しい力だった。

「はっ、謹んでお教えに従いまする——」

彼が深々と頭をさげた時、頭上で声があった。

「ゆめゆめ疑うこと勿れ……」

はっと見上げたが、菩薩たちの姿は、かき消すごとくに消えていた。

その時、夢が破れて、眼が覚めた。

「不思議な夢であったな」

彼は、床の上に身を起した。断食に入って五日目になっているのに、なんとも爽やかな気分であった。風病の痛みも、心持ち薄らいでいるようである。

「ありがたいことだ」

老僧は、独りごちた。彼の名を、シーラバドラという。漢字で書くと、戒賢法師である。世界に冠たる天竺・那爛陀（ナーランダ）寺の正法蔵——この寺第一の大徳であった。

——東の国チーナから、いったいどんな僧が来るといふのか？

夢のなかの文殊菩薩の言葉からは、チーナに仏法を広め得る男のようであった。彼は、チーナに行ったことはない。だが、その国の実情は知っていた。いまは、唐と呼ばれており、大乘だいじょう仏教が行われている。

——楽しみなことじゃ。さて、それまでは、しっかり生きねばならぬ。御仏のご加護を信じてな。

戒賢は、枕元の鈴をとって振った。入って来た従僧に、彼はいった。

「すまぬが、粥かゆを持って来てくれぬか」

「正法蔵さま、粥をでございますか？」

師の坊の入寂にゅうじやくのための断食を知っている従僧が、驚いて問い返した。

「そうじゃ。死ぬのはやめじゃ。あと数年、生きておらねばならぬ。これは、御仏との約定やくじょうでな」

老僧は、一人で含み笑いしていた。訳はわからぬが、師の坊の気が変わったことは間違いない。従僧の顔に歓喜の表情が走った。

「はい、只今用意いたします……」

慌しく立ち去る従僧を見て、戒賢はまた独りごちた。

——どんな男が来るのか、とくと見極めてくれよう。チーナからこのナーランダーに来るには、三年はかかるじゃろうが……。

ナーランダー寺は、マガダ国の旧都ラージャグリハ（王舎城）の北郊、尼連にれんぜんが禪河の東岸に

あり、仏陀が大覚きとりを開いたブツダガヤの東北約百キロにある。

当時、ナーランダ―寺は、他に比肩するもののない仏法研究の殿堂であり、世界一の権威ある大学であった。

大乘仏教を中心に諸派の仏教教義が研究され、古典『ヴェーダ』をはじめ、因明いんみょう（論理）、声明しやうみやう（音韻）はもとより医学、数学にわたる諸学の権威者が集まっていた。数千の学生は、毎日百余カ所で開かれる講座で、それぞれの研究に寸暇を惜しんで没頭していた。学生は、単に天竺からだけに留まらず、諸国から集まった秀才が、この最高学府に学んでいた。一度境内に入れば、仏法の深い教義を論ずる者にあらざれば、誰からも相手にされないほどの好学の気風がみなぎっていた。

寺の敷地は、もとアームラ長者の私有地であったのを、五百人の商人が買いとって釈尊に寄進し、釈尊もこの地で三カ月間説法した、と伝えられている。仏滅後、マガダ国王シヤクラデーチャがこの地に寺を建て、その後、歴代の国王が増築して、現在の規模の広壮なものになった。

多くの伽藍がらんの回りを高い煉瓦塼が囲み、華麗な建物の間には、緑水がゆるやかに流れ、蓮花の咲き誇る大小の池のほとりには、カナカ樹が繁り、孔雀が舞っている。その傍には、マンゴーの樹林が涼しげな木陰をつくっていた。

諸院僧房は、四階建てで、すべて丹青たんせいで彩色され、いたるところに彫刻が施されていた。高い塔は、仏典の保管場所を兼ねた、図書館の役目をしている。

寺の外側にも、いくつかの見事な建物が並んでいた。東方には、高さ八十余尺の銅の仏像



があり、六層の重閣で被<sup>お</sup>つてある。また、西には、カニヤークブジャの戒日王が、銅のヴィハーラ（精舎）を建築していた。

マガダの支配者である戒日王は、近隣百余邑<sup>ゆう</sup>の収入をすべてこの寺の維持に充てており、毎日二百戸から米、バター、牛乳などの寄進があり、学生たちは衣食の心配なく研究に没頭することが可能であった。

「旨<sup>うま</sup>い。久しぶりの粥は旨いのう……」

正法蔵戒賢法師は、従僧が運んできた粥を啜<sup>すす</sup>りながらいった。

「正法蔵さま、痛みませぬか？」

従僧が、心配気に訊く。

「大事ない、大事ない。風病はどこかへ飛んでいったようじゃわ……」

戒賢は、腕に残った最後の粥を啜り終った。

「見違えるほどお元気になられましたわい——」

驚く従僧に、ちらっと微笑を投げかけて、戒賢が立ち上った。

「御仏にお礼を申してこようかのう」

東の空が白みかかっていた。

六二七年の秋八月のことである。

唐風にいうと、六二七年は、二代目皇帝太宗の貞観元年である。

その秋八月、一人の青年僧が、西の方、遙かなる天竺を目指して、いままきに都長安を旅立とうとしていた――。

## 嵩 山

## 1

「ほんに、めでたいことよのう——」

祝いの赤飯を炊くため、糯米もちこめをといでいた老婆が、手を休めていった。

「なんととっても、四十を過ぎてからのお子の誕生じゃ。水鏡先生も、さぞお喜びであろう  
て」

隣で煮物をつくっていた中年の女が、相槌を打った。

「ところがのう、そう喜んでばかりはおれぬことがあるのじゃよ」

脇で野菜を洗っていたあばたの女が、気をもたせるように声をひそめた。

「どうしたというのじゃ？」

と、老婆。

「それがのう……」

どこかで、ウグイスが鳴いていた。のどかな陽の光が、外の木立ちに降り注いでいる。  
「気をもたせず早くいうがよいわ」